

## 男性看護職者の職業意識と性役割に関する研究

増井 麻依子<sup>1\*</sup>・石村由利子<sup>2</sup>

<sup>1</sup>大阪信愛女学院短期大学看護学科

<sup>2</sup>和歌山県立医科大学保健看護学部

---

### Research on a Male Nursing Job Person's Occupational Consciousness and Gender Role

Maiko Masui<sup>1</sup> and Yuriko Ishimura<sup>2</sup>

<sup>1</sup>Osaka Shin-Ai College and <sup>2</sup>Wakayama Medical College

Abstract. The purpose of this research gets to know the gender role view by hearing a male nurse gender role, shows clearly how the gender role attitude has influenced the job posture, and inquires. As a result of investigating to seven male nurses who are research candidates, the following things became clear about the male nurse. ①The male nurse considers that coexistence of a home and work is natural, and there are few prejudices by gender role as well as the research to a female nurse than men in general. ②In a home life, the opinion which gender role needs is also considered to have the idea of a certain tradition nature intention which is the characteristic of a Japanese male's gender role attitude at a home on the other hand though the idea of sexual equality is supported more than a woman, and sexual equality. ③The thing enhanced about an educational system and the management system suitable at man nurse's life cycle is necessary.

Key words: man, nurse, gender role

Human and Environment Vol. 5 (2012)

---

### 1. はじめに

わが国において看護職は明治時代の教育制度発足以来「女性の職業」として認識されてきた[1]。看護職は女性社会特有の問題を抱えながら発展し、専門性を高めてきたが、このような歴史を考えるとときに少数ではあっても医療現場において重要な役割を果たしてきた男性看護師の存在を見過ごすことはできないであろう。

平成14年3月に施行された保健師助産師看護師法によりそれまでの看護士看護婦という性別による名称の違いは公式になくなり、看護職者の名称は「看護師」に統一されるようになった。しかし、それまで看護職の教育を男女で区別してきた歴史や看護職が女性中心の職業組織であったことから[2,3]少数派である男性看護師が職業上「男性」であることの特異性を感じていることについての報告がされている[4]。私自身職場において男性看護師と共に働いてきたなかで、看護職に従事するうえで生じる男性としての職業上の性役割に関する悩みや不満を何度か耳にすることがあり、性役割や看護職としての職務姿勢には男女で格差があるのではないかと考えてきた。過去の研究において女性看護職を対象にした職業意識と性役割の関連性を検討した研究[5]、専門化をめぐる看護職の意識に関する研究[6]などが行われているが男性看護師を対象とした研究は

---

\* 〒538-0053 大阪市鶴見区鶴見 6-2-28 大阪信愛女学院短期大学看護学科

E-mail: m-masui@osaka-shinai.ac.jp

受付：2012年4月15日、受理：2012年5月30日

©2012 大阪信愛女学院短期大学

表1 対象概要

	A	B	C	D	E	F	G
年代	20代後半	30代前半	30代前半	30代前半	30代前半	40代前半	50代後半
看護職経験	8年	6年	8年	13年	14年	15年	30年
結婚の有無	既婚	既婚	既婚	既婚	既婚	既婚	既婚
育児経験	あり	なし	あり	あり	あり	あり	あり
看護職以外の職についての経験	なし	なし	なし	なし	なし	あり	あり

表2 インタビューガイド

職務姿勢に関すること	性役割に関すること
1) 看護師になろうと思ったきっかけ 2) 看護師としてやりがいを感じるか 3) 仕事を変わりたいと思ったことがあるか 4) 仕事と家庭の両立についてどう考えているか	1. 女性の多くいる職場をどう思うか 2. 女性看護師に対するイメージについて 3. 男性看護師に対するイメージについて 4. 仕事内容をもっと男女の性別によって分担した方がよいと思う仕事の内容があると思うか 5. 家庭においても男性も家事を分担した方がよいと思うか

少なかった。そこで本研究では、男性看護師の性役割を聞くことでその性役割観を知り、性役割態度がどのように職務姿勢に影響しているかを明らかにし検討することを目的とした。

◇用語の定義

- ① 職業意識：職業生活に対する見方、考え方とした。
- ② 性役割態度：男女それぞれ相応しいと期待されているパーソナリティや行動の特性で、ジェンダーを意識することから自己概念に組み込まれた価値観に基づいて、一貫して示される反応や態度を性役割態度とした。

2. 研究方法(対象)

X 県内の臨床あるいは看護教育に従事する看護師の資格を持つ男性で、協力を得られた7名を対象とした(表1)。

研究期間：200X年5月から200X年11月。

研究デザイン：因子探索型研究。

データ収集：データの収集は、岩永らの研究[5]で用いられた質問調査票に修正を加えて、表2に示すインタビューガイドを作成し、半構成的面接法を用いて行った。質問項目は、表2に示す職務姿勢に関すること4項目、性役割態度に関すること5項目を設定した。

分析方法：インタビューの内容を忠実に書き留めたものを再構成し、各質問の回答内容の類似性に従って分類し、分析を行った。

倫理的配慮：本研究は、X 県病院事業庁県立病院看護職臨床看護研究において、研究内容について検討されている。対象者にはあらかじめ文章で研究の主旨を説明し、プライバシーの保護を約束したのち同意書により研究協力の同意を得ている。

3. 結果

3.1. 職務姿勢について

職務姿勢に関する回答について分類し、表3に示した。「看護師としてやりがいを感じているか」という問いに対して「満足感を感じている」と答えた人は5人おり、仕事の内容や周囲の状況に影響は受けるものの、人との関わりから得るものや職務内容の高度化・専門化が充実感をもたらしていた。しかし、満足感の高い5人のうち「仕事を変わりたいと思ったことはない」と答えた人は2人だけであった。仕事と家庭の両立を図ることは、7人とも必要と答え、努力している様子が窺われたが、E、Fの2名は家族の援助があり、十分な役割を果たしていないことが語られた。

3.2. 性役割態度について

性役割態度に関する回答について分類し、表4に示した。女性の多い職場であることに対して特にこだわりは持たないが、男性看護師のイメージとして「男性看護師は用心棒や何でも屋のように考えられている存在」などのように自己批判的な回答もいくつか聞かれた。

表3 職務姿勢に関すること

	結果	代表的回答
質問 1	①身近にいた医療従事者 ②人の役に立つ仕事 ③病気に苦しむ人の存在 ④職業としての専門性 ⑤看護学への興味	①「看護の仕事について聞いて、看護を知りたいと思った」「家族に看護に従事するものがいた」 ②「福祉などの人の役に立つ仕事をしたかった」 ③「病弱な母の姿を見て医療従事者として働きたかった」 ④「ライセンスを持って働きたかった」 ⑤「(他の学問より) 看護の方が面白いと感じた」
質問 2	①満足感 ②仕事の高度化・専門化 ③仕事の経験、内容、生活状況によって違う	①「人との関わりはやりがいがある」 ②「医療の進歩で仕事が専門化している」 ③「子供が小さいときは育児優先にせざるを得ない育児が一段落したら専門的キャリアを積みたい、そのための研修制度が欲しい」
質問 3	①考えたことがない ②漠然と考えたことがある ③考えたことがある	①「自分に向いている仕事他にない」 ②「嫌になったことはあるが、看護の仕事を全うしたい」
質問 4	①両立は必要、努力も大切 ②両立は必要だが自分自身は充分に行っていない ③両立は必要だが家族が家にいるので助けてもらっている	①共働きなので協力が必要」「妻に任せたままではいけない」 ②好きな事家事しかしなしので、あてにされていない」 ③一家の大黒柱なので家族の援助が必要、家に家族がいるので家事をしてもらっている」

「仕事を男女の性別で区別したほうが良いか」という問いに対して「区別が必要」と答えた人はいなかった。また「区別すべきでない」と回答した人は4人で、このうち3人(A、B、G)は、「家庭において男性も家事を分担したほうが良い」と答え、性による差別感を持っていなかった。特に乳幼児から学童期の子供を持つ若い世代には家庭内での家事の分担の必要性が強く認識されており「子供が小さいときには育児を優先せざるを得なし」という回答が示された。

### 3.3. 職務姿勢と性役割態度の関係

表5に回答の内容を個人別に示した。「男女の性別で区別すべき仕事はあるか(「性役割態度」質問4)との問いに対して、「区別すべきでない」と平等性の高い回答をしている一方で家庭と仕事の両立(「職務姿勢」質問4)で家庭のことは全て家族にしてもらっていると回答した人がいた。

「職務姿勢」に関する回答から、7人全員がキャリア志向で、家庭指向型に属する人はいないと判断できた。「性役割態度」に関しては、7人中5人が家庭重視の平等性志向であり、残りの2人は伝統性志向に傾くと分類できた。Fは一度離職しているが、高い意識と目標を持ち復職しており、キャリア志向をより高く持っている様子が窺われた。Bについても看護学をより深めていこうという姿勢が強く語られ同じくキャリア志向は高いと判断された。E、Fの対象者が他と比べ伝統性志向の位置に分類されているのは、職務姿勢の

質問4において仕事と家庭の両立の必要性を語りながらも、他の5人の対象者と比べ実際の家事への参加が少ないからである。また、A、C、Dの3人は、育児における父親の存在の重要性を語り家事にも積極的に参加していることから、他の対象者よりも家庭重視・平等性志向の高い位置に分類した。

## 4. 考察

### 4.1. 職務姿勢について

職務姿勢について看護師(医療職)に希望してついた人、そうでない人に関わらず7人の対象者全員が男女平等性や責任感が強く、公的生活(仕事)を重視するキャリア志向であると考えられた。これは、対象者が女性の多い職場に勤務する専門職の男性看護師であることや、勤務年数が6年以上(そのうち4人が10年以上)で、自己啓発に努めキャリア志向型に移行していった後の状況にある人が多かったことが影響したと考えられる。また、対象者の中でも、乳幼児から学童期の子供を持つ人は、子育ての時期は育児を優先せざるを得ないと回答していた。これらの人は育児が一段落する時期から積極的にキャリアを積んでいきたいと答えていたがそのための教育システム管理システムの充実や勤務体制の検討、改善が必要であると考えられた。例えば、全国比率の3倍の看護師がいる沖縄県において[7]男性看護師を中心とした努力により職場環境、看護

表4 役割態度に関すること

	結果	代表的回答
質問 1	①特に思うことはない ②過去と現在で感じ方が違う ③ ひとくくりにはできない	①「女性が多くいることにこだわりはない」 ②「昔はつらかったが今は何ともない」 ③「きめ細やかな人がいる半面、優しくない人もいる」
質問 2	①仕事の上でも男性にないものを持っている ②男性看護師を便利の良い存在だと考えている ③負の部分 ④時代の変化 ⑤特にイメージはない	①「看護は女性の特性に適した仕事」 ②「面倒な仕事を男性看護師に押し付ける」 ③「やさしくない、おしゃべり」 ④「昔は女性看護師に負のイメージがあったが今の若手看護師にはない」 ⑤「男だろうが女だろうが関係ない」
質問 3	①仕事の上で必要とされる男性的な部分 ②女性看護師と比べ足りない部分がある ③看護職における数少ない存在	①「精神科では男性を用心棒と考えていた」 「父親的存在（父性）」 ②「柔軟性に欠け、きめ細やかさが無い」 ③「男性看護師はマイノリティー」
質問 4	①区別すべきでない ②区別が必要な仕事もある	①区別せず協力すればよい」 ②「科によって、腕力や父性が必要とされるときは必要」 「小児科では、母性・父性の区別が必要」
質問 5	①分担は必要 ②家庭の状況によって違う その時々によって考え方が変化した	①共働きはやっていけない」 ②「共働きの家は必要だが、自分は家族に協力してもらっている」 ③「独身の頃は家事を女の仕事と考えていたが、共働きをするようになって、頑張らないといけないと思った」

表5 対象者の回答内容

	問	A	B	C	D	E	F	G
職務 姿勢	1	② ③	⑤	① ③	① ④	②	① ② ③	① ② ④
	2	① ② ③	③	① ② ③	① ②	① ②	② ③	① ③
	3	③	②	① ③	③	②	③	②
	4	①		①	①			
性 役割 態度	1	②	①	②	①	③	③	③
	2	① ② ③ ④	⑤	②	④	②	① ③	① ③
	3	②	③	②	③	①	②	① ②
	4	①	① ②	②	②	① ②	②	①
	5	① ③	①	①		② ③	② ③	

注) 回答番号は表3、表4参照

職の配置状況の改善がなされた例もあり[8]看護師が看護の新たな分野に挑戦し道を切り開いていくことは、看護の発展向上に必要なことだといえる。

岩永の研究[5]において女性看護師の大半が家庭と仕事の両立を当然とみなしたことと同様の傾向が、男性看護師からも回答された。子育てにウエイトを置かなければならない時期にある中堅クラスの男性看護師に家庭重視派が多くいたが女性はその時期に就業継続に大きな迷いを感じていたのとは違い男性からは両立の大切さと子育てに関わることの重要性が語られた。

#### 4.2. 性役割態度について

性役割態度に関することについて、男女の身体的な違い(腕力など)や「母性」「父性」の役割はあるが、職務姿勢において男性看護師の腕力など、男性の特性といえる部分を必要とされることへの不満、不快感があり、女性と対等に専門的な部分で評価して欲しいということが、男性看護師に強いストレスを与え続けている[9]ということが本研究においても同様にみられた。しかし、仕事の上での男女の区別は良くないといっている人にも、家庭における男女の役割には、男女の区別をつけたほうが良いと答えるような伝統性志向と平等性志向を併せ持つ人がいた。このことから、家事を分担しても家庭において女性が行う家事労働のウエイ

トは依然重たいものだと考えられる。

## 5. おわりに

①男性看護師は家庭と仕事の両立を当然とみなしており、女性の研究同様、一般男性より性役割のこだわりは少ない。②家庭生活において性役割は必要とする意見もあるが、女性の多い職場では、女性以上に平等性志向を養いながらも、家庭においては、日本男性の性役割態度の特性である伝統性志向と平等性志向を併せ持っていると思われる。③男性看護師についても、ライフサイクルに合わせた教育システムや、管理システムの充実が必要であるといえる。

### 本研究の限界

この研究の結果は X 県の一部地域に在住する 7 人の男性看護師から得られたものであり、この研究結果での男性看護師の職業意識や性役割問の傾向を一般化することは出来ない。

### 謝辞

本研究をまとめるにあたり、お忙しいなかご協力くださいました皆様方に深く感謝申し上げます。

## 文 献

- [1] 川島みどり:看護の自立. 勤草書房, 90-112, 東京 (1978)
- [2] 北島謙吾:我が国における看護師養成の歴史と現状. ころの臨床 15(1), 43-47 (1996)
- [3] 山田正巳:男性看護師の歴史と現状からの一考察. 看護教育, 1032-1037 (2004)
- [4] 北林司:男性看護師が認識する男性であることの特異性 X 県におけるインタビュー調査から. 看護学雑誌 6(3), 1022-1027 (2002)

- [5] 岩永智恵子:看護職の職業意識構造に関する研究—職業意識と性役割感との関連の検討—. Quality Nursing 6(2), 43-52 (2000)
- [6] 天野正子:「女性の仕事」「女性社会」「女性管理者」. 病院 36(5), 27-30 (1977)
- [7] 厚生労働大臣官房統計情報部:平成12年度衛生行政報告例. 厚生統計協会 (2002)
- [8] 中本勉:沖縄における男性看護師の実態—活躍の場を模索する男性看護師たち—. 看護学雑誌 4(2), 1028-1031 (2002)
- [9] 林克明:男性看護師の持つ専門職としての意識—カリキュラム改正前・後よりみる—. 第34回日本看護学会論文集(看護総合), 210-212 (2003)

---

**要約:** 本研究の目的は、男性看護師の性役割を聞くことでその性役割腹見を知り、性役割態度がどのように職務姿勢に影響しているかを明らかにし、検討することである。研究対象者である男性看護師 7 名に調査した結果、男性看護師について以下のことが明らかになった。①男性看護師は家庭と仕事の両立を当然とみなしており、女性の研究同様、一般男性より性役割へのこだわりは少ない。②家庭生活において、性役割地必要とする意見もある一方、女性の多い職場では女性以上に平等性志向を養いながらも、家庭においては、日本男性の性役割態度の特性である伝統性志向と平等性志向を併せ持っていると思われる。③男性看護師についてもライフサイクルに合わせた教育システムや管理システムの充実が必要である。

キーワード: 男性、看護師、性役割

---

論文集 人と環境 Vol. 5 (2012)

大阪信愛生命環境総合研究所編集

---